疾病や障害の当事者の意思決定支援をめぐる領域横断的議論の論点

――「コンテクスト」と「自己理解」への着眼――

国立保健医療科学院　松繁卓哉

1　目的

近年，疾病や障害の当事者が治療法や各種サービスの選択をする際の「意思決定支援」の手法の開発が進められている。他方，意思決定支援アプローチをめぐって，社会学・心理学・その他の隣接領域で相互の批判的検討も展開されている。患者の「意思」「視点」「志向」が、それぞれの生活コンテクストに根差して非常に複雑に構成されているにもかかわらず、医療の提供者側の視点からすると単に「非科学的」「リテラシーの不足」であると解釈される問題が、これまでにも指摘されてきた（松繁 2010）。近年の批判的検討の取り組みの中では、この「コンテクスト」への向き合い方が論点の一つになっている。

近年は「自助」「セルフケア」といった概念が重要視され、当事者のセルフケア支援の必要性に対する認識も高まりを見せている。この問題に関しては、看護研究の中で長年にわたる知見の積み重ねがあるが、近年、社会学研究の中でも独自の問題設定がなされてきている（松繁 2012）．こうして、意思決定支援のアプローチをめぐる問題は、学際的な検討を要することが認識されつつあるものの、その取り組みは途上にある。本報告の目的は，意思決定支援をめぐる近年の分野横断的議論をレビューし、社会学研究に寄せられる今後の課題を明らかにすることにある．

2　方法

文献レビューと、意思決定支援に携わる関係者のインタビューをもとに、支援アプローチをめぐり課題とされている点を整理した。文献レビューでは、意思決定（decision-making）、意思決定支援（decision-making support），患者視点（patient’s view），コミュニケーション（communication）をキーワードに、国内外の文献を検索し、分析をおこなった。インタビュー調査では、それぞれの支援アプローチの概要・特徴等や、臨床現場での活用状況等について半構造化形式で聞き取りを実施した。

3　結果

心理学の知見が、支援の手法の開発に重要な貢献をしてきた一方で、セルフケアや意思決定の支援において有効に機能したケースと、しなかったケースとを隔てる原因については、必ずしも強力なエビデンスが示されてきたわけではなかった。どのような「コンテクスト」において、既存のアプローチが実り多い支援に結びついたのか、そこでの支援者と被支援者との相互作用はどのように展開したのか、支援されたセルフケアと正規の保健・医療・福祉のサービスがどのような有機的結合をしたのかなど、社会学に期待される課題が多く存在している。

4　結論

意思決定の支援をする前段として、当事者が自らの置かれている状況について時間をかけて振り返り、また、自らのプライオリティの置き方を自問自答していく「自己理解」のプロセスが不可欠であり、結局それが重要な「コンテクスト」を形成するにもかかわらず、支援的介入の視点が前面に出ることによって、そのプロセスが単純化されるところに最大の課題がある。

文献

松繁卓哉，2010，『「患者中心の医療」という言説―患者の「知」の社会学』立教大学出版会．
松繁卓哉．2012．地域包括ケアシステムにおける自助・互助の課題．保健医療科学．61(2)：113-118.